

木下長嘯子筆「十六夜の文」——吉村観阿と溝口翠濤の關係に注目して——

宮 武 慶 之

豊臣秀吉の正室北政所の甥、木下勝俊（長嘯子）は和歌を細川幽斎に学び、同じ幽斎門下の俳諧師松永貞徳とも交流した。長嘯子が貞徳に宛てた消息を、現在個人が所蔵する。消息中、十六夜の日に詠じた二首の和歌があることから本稿では「十六夜の文」と称する。先行研究で「十六夜の文」は吉田幸一により紹介されていたが、作品自体を紹介するのみであった。調査を実施したところ、江戸の町人数寄者吉村観阿による巻止および箱墨書、新発田藩主溝口家の旧蔵品を示す蔵印が貼られていた。同家の記録により十代藩主溝口直諒（翠濤）の茶会で本幅を拝見した小堀正優（宗中）は激賞していた。本稿では改めて「十六夜の文」を紹介し、墨書と蔵印から観阿と溝口家の關係を論じる。

一 「十六夜の文」について

木下勝俊（長嘯子、挙白、天哉爺／一五六九―一六四九。以下では長嘯子に統一する）は豊臣秀吉（一五三七―一五九八）の正室北政所（一六二四没）の兄木下家定（一五四三―一六〇八）の長男で、豊臣の姓を許された人物である。若狭小浜城主となり官位は従四位下、左近衛権少将。

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の合戦では東軍に属した。徳川家康（一五四三―一六一六）から伏見城留守居を命じられるが、鳥居元忠（一五三九―一六〇〇）に退去を迫られ、この事が原因で改易となる。その後は東山にある北政所の住居であった高台寺近くに挙白堂を営み、

晩年は大原野にて隠棲し、茶の湯や和歌などをして過ぐす。小堀政一（遠州／一五七九―一六四七）や佐川田昌俊（喜六／一五七九―一六四三）らと茶の湯や和歌を通じて親しく交流した。また長嘯子は唐物文琳茶入銘「木下丸壺」⁽¹⁾や唐物肩衝茶入銘「靱肩衝」⁽²⁾を所有したことも知られる。歌道は細川藤孝（幽斎／一五三四―一六一〇）に学んだ。幽斎の同門であった松永勝熊（貞徳／一五七一―一六五四）とも親しく交流した。貞徳は連歌師里村紹巴（一五二五―一六〇二）から連歌を学び、九条植通（一五〇六―一五九四）や幽斎から和歌、歌学を学んだ。のちに秀吉の右筆となり、長嘯子を友とした。慶長二年に朝廷から花咲の翁の称を与えられ、俳諧宗匠の免許を許される。貞徳の歌風はその後、松尾芭蕉（一六四四―一六九四）の俳諧に影響を与えた点で評価されている。

長嘯子が貞徳に送った消息(図1)がある。本稿では消息中に十六夜の夜に詠まれた二首の歌が書かれることから「十六夜の文」と称する。

先行研究において「十六夜の文」は吉田幸一『文学論藻(通号四十八号)』(一九七三年)⁽³⁾で紹介された。同書で吉田は新出の資料となる書簡八通すなわち貞徳宛長嘯子書簡三件、駒四郎左衛門貞清宛貞徳書簡三件、長嘯子宛北政所書簡一件、高台寺宛長嘯子書簡一件を紹介している。貞徳宛長嘯子書簡三件のうちの一件が「十六夜の文」であり、当時、新たな長嘯子資料として注目された。このほか「十六夜の文」は吉田幸一による『長嘯子全集(第五卷)』(一九七五年)でも取り上げられた⁽⁴⁾。

『文学論藻』において吉田は、文中の「おちゃあ」と「おつう」について、後述するように「おちゃあ」とは茶々(一五六九—一六一五)、「おつう」とは侍女通(生没年不詳)としている。

吉田が論考を発表してより以後、個人が所蔵したため最近まで所在不明であった⁽⁵⁾。筆者は江戸時代後期に江戸で道具目利きとして著名であった町人数寄者吉村観阿(白醉庵／一七六五—一八四八)の研究を行なっている⁽⁶⁾。観阿の箱墨書がある作品調査の過程で、「十六夜の文」は現在、個人が所蔵していることを確認した。

「十六夜の文」の字粒は大きく、伸びやかに書かれている。本紙寸法は縦二七・九_{チセ}、横八七・九_{チセ}。掛幅装となる。

消息には次のように書かれている。

此短冊者此者

返可給候 かしく

一昨日御ちやあ御つう

御出候まゝ以使者申入候

處無其儀候即

吟被遊候短冊共

もたせてまいらせ候可有

一覽候将亦我々先日

十七日まで彼山庄にて

いさよいの月たとひとり

見申候つる物さひひとしほ

心すみわたり候つる月を

待かね候て靈山のみねを

こそやましなのうへまで

あかり候へは月いて申清光を

おひて帰宅已さる

おりしも古今序に

月をおもふとてしるへなき

やみとれるといへる事おもひ

いてられ候まゝ

まことにそ間にたとれる出ぬまは

月まつやまによちのほりつと

さひしさは山のかひあるすみかにて

心ひとつのしつかなる哉 人々

被歸候て一心無事仙郷候

メ勝遊老 獨咲

日付の記載はない。一昨日「おちゃあ」、「おつう」の来駕があるということで、使者をもって申し入れたところ来駕はなかった。なお吉田に

よれば、二者について次のように紹介している。

この書状の「おちゃあ」については、刊本『挙白集』巻第七所収の「あるをうなにつかはす消息」が、龍大本『長嘯家集』には「おちゃあ御かたまいる」と、おちゃあ宛となっていること、「おつう」については、同上所収の「ある人のもとにつかはす消息」が、彰考館本（異本挙白集）では、「通女に遣しける」となっていることによつて、この二人は、身分のある女性であることが知られよう。⁽⁷⁾

その理由として、『長嘯家集』（龍谷大学蔵）にある次の消息を挙げている。

秋立ける日、萩の葉のたよりにつけて、ひそかにそよとをとつれきこえんと、かたくなとるうた三つを、とくりたてまつりて、かのいみしきことはの花をまねくものならし

秋立しかせのつてにもをとせず萩の葉よりもひとやうらみん
おもひやるたもとよいかに秋たてはさらぬくさはもつゆけきものを
もろともにくまなき空の月をみんなころのやみはほとなかるへき

御ちやあ御かた まいる⁽⁸⁾

秋の日、歌三首を届けてきた点について、吉田は「十六夜の文」中の「一昨日、おちゃあ、おつう御出候まゝ、使者を以て申入候処」と符合することから、この二者を茶々、通としている。

後日、「吟遊遊ばされた」際の短冊を遣わしてきた。文面からこの書

状と一緒に短冊も貞徳のもとに届けられ、追而書から一覧するようにと記される。

消息によれば十七日まで山荘にいたという。この山荘とは高台院近くに長嘯子が営んだ挙白堂をさすものと考えられる。旧暦八月十六日の十六夜の月をただ一人でみていると物寂しい雰囲気であったが、一人、心が澄み渡った気持ちになったようである。そのため靈山、すなわち靈鷲山正法寺（国阿山）あたりの山を越え山科まで足を運び、月の清き光を求めたという。このように月を求める自身の姿を、古今和歌集仮名序で述べられる一節に重ねており、ただ月を求めてさ迷い歩いた姿と重なたと解することができ⁽⁹⁾。そして二首を詠じた。その二首とは「まことにそ間にたとれる出ぬま八月まつやまによちのほりつつ」と「さひしさハ山のかひあるすみかにて心ひとつのしつかなる哉」である⁽¹¹⁾。

署名は長嘯子の号のひとつ独笑である。なお『長嘯子全集（巻五）』では長嘯子消息が八十九件所収されるも、署名に「独笑」とあるのは「十六夜の文」のみである⁽¹²⁾。

二 付属品にみる観阿と翠濤の関係

「十六夜の文」の巻止には

天哉翁文 貞徳宛 白醉庵（花押）

の墨書がある。

白醉庵とは吉村観阿の号である。観阿は江戸後期に江戸で活躍した町人数寄者で、名は明昭、号は物外、聴笙、指月斎、苦楽という。生家の

事情によつて三十四歳で出家するが、このとき俊乗房重源（一一二一―一二〇六）による「法華勸進状」（東大寺蔵）は手放さずにいた。その後、公般上人の求めもあつて東大寺に寄進し、寿蔵（生前墓）を勸学院内に建てる事が許される。観阿は江戸において目利きとしても著名で、四十代には松江藩七代藩主松平治郷（不昧／一七五一―一八一八）と交流し、不昧没後は溝口翠濤新発田藩十代藩主溝口直諒（翠濤、退翁、景山／一七九九―一八五九。以下では翠濤と統一する）と親しく交流していた人物である。⁽¹³⁾

収納する箱甲（図2）には

東山長嘯公消息 貞徳宛

とあり、裏（図3）には

白醉庵

観阿（花押）

と書かれていることから、こちらも観阿による筆とわかる。

箱墨書の「観阿」と自署している筆跡は謹直に書かれていた。花押は筆に勢いがあり、「二」の線が謹直である。そこで観阿の花押の書かれた年代について検討したい。

観阿は文化十四年（一一八七）、五十三歳のとき東大寺に重源による「法華勸進状」を寄進した。東大寺が平安時代末期に平重衡（一一五七―一一八五）による南都焼き討ちにより罹災したため、重源は東大寺の大勸進に任ぜられる。そのとき重源の筆により勸進状が書かれた。「法

華勸進状」とは、元久二年（一二〇五）十二月、東大寺東塔の完成後は十報に童を配して法華経を千部、転読させたい旨を認めたものである。奥書には自署と花押（図4）が書かれ、観阿五十三歳時点のものである。

天保五年（一八三四）、古稀（七十歳）を記念して瓢茶器が百二十五个造られた。茶器を収納する箱墨書には観阿の花押（図5）がある。茶器の現存が確認できないため、『知音（五十号）』（一九五四年）⁽¹⁴⁾に所載される図版から花押の所見を述べると、「二」の部分がやや右上がりに書かれる傾向があり、下部分も五十代には△に近い形態であったが、やや膨らみを持たせて書かれている。

天保十五年、傘寿（八十歳）を記念して原羊遊斎（一七六九―一八四五）に依頼して「一閑桃之絵細棗」（個人蔵）を百二十五個造り、知友に配っていた。なお、この細棗は同年に複数回開催された茶会の記念品として配られたものである。⁽¹⁵⁾

一閑張りの手法で造られた細棗の甲部には朱金で桃の蒔絵が施される。桃の図柄に注目すると半分は朱、半分は金である。葉は三枚、茎は一本、花は一輪蒔絵される。葉の三枚は青漆で、葉脈が金蒔絵される。茎の一本は金蒔絵で、荒めの砂子が撒かれている。花の一輪は銀蒔絵される。細棗を収納する箱墨書には観阿の花押（図6）がある。この花押は七十歳の時の花押と変化はないものの、「二」の部分の中央あたりがやや細い線で書かれている特徴がある。

以上の点から、「十六夜の文」を収納する箱墨書の花押は五十代後半から遅くとも六十歳後半までと判断され、すなわち文政元年（一一八八）の五十四歳以降、天保五年の七十歳までの間の筆跡と考えられる。

次に「十六夜の文」を収納する箱側面をみると部分的に剥落した蔵印が貼られており、「碧雲山房蓄蔵物品」と判読できる（図7）。この蔵印は

新発田藩主溝口家の旧蔵品の箱もしくは覆紙に貼られている蔵印である。⁽¹⁶⁾そこで溝口家の所蔵した掛物の所蔵品リストである『御掛物帳』(新発田市立歴史図書館蔵)をみてみると「秋之部」には次のような記述がある。

一 十六夜之文 長嘯子消息貞徳宛⁽¹⁷⁾

本品は溝口家伝来品であり、個人蔵品と同定される。

ところで観阿と親しく交流した溝口家当主では翠濤がいる。翠濤は新発田藩茶道阿部休巴(一七八五―一八五三)に石州流の茶を学び、自ら石州怡溪派を名乗った茶人大名であった。新発田藩の中屋敷は江戸木挽町にあり、別に幽清館という。ここには茶室等が点在し、翠濤は隠居後、茶の湯を嗜み過ぎた。幽清館での雑記が『幽清館雑記』(東京大学史料編纂所蔵)である。⁽¹⁸⁾この雑記は雑記十二卷(ただし第九卷は欠)と『千貫樹記』、『小浦浪記』からなる。これらの筆跡をみると翠濤自身の筆記または近習の家臣による筆録である。観阿に関し、同書をみると次のような記述がある。

文政三庚辰年より道具を屋敷へ出し同四年辛巳年より屋敷へ出入となる(卷十二)

観阿と翠濤との交渉が始まったのは文政三年(一八二〇)のころで、その接点は、観阿が溝口家の道具を鑑定したことによる。そのため翌年の文政四年より溝口家への出入りを許される。

観阿と翠濤の関係で注目されるのが、取次ぎによる道具の売却である。これまでの筆者の研究で明らかにした観阿の取次ぎにより翠濤が入

手した道具は大燈国師墨蹟「日山之賦」(MIHO MUSEUM蔵)⁽¹⁹⁾、小堀遠州所持「三不点茶箱」、石清水八幡宮伝来額「聾」があつた。⁽²⁰⁾

「十六夜の文」には観阿の箱墨書と溝口家の蔵印があることから、本幅も観阿の取次ぎにより翠濤に売却された作品であり、その後は溝口家に伝来したことが判明する。

このような観阿により取り次がれた作品では北宋時代の画家趙昌の筆によるとされる釈迦如来像、江戸時代初期に活躍した狩野派の画家狩野探幽(一六〇二―一六七四)による江月宗玩像、同筆佐久間将監像の三幅(図8)があると考えられる。この三幅について門脇むつみ氏が『東都寸松庵主所蔵品』と『堺市宅醸春軒所蔵品入札(第二回)』に所載されると報告している。また江月による自像の賛文は寛文十一年に書かれ、将監像の賛文は『東都茶会記(第一輯)』に所載されていることを紹介している。⁽²¹⁾

そこで各目録の表記をみると三幅を収納する箱には江月による自刻の箱、外箱には白酔庵の書付があると記載される。⁽²²⁾この三幅は寸松庵に伝来したようであるが、いつの時代にか流出した。

先出の『御掛物帳』の「雑之部」をみると

左江月探幽筆

一 三幅對中釋迦趙昌二申傳

右佐久間探幽筆

と所載され、目録所載品と同定される。外箱には観阿の書付があることから、やはり同人の取次により溝口家が所蔵していたと判断される。なお、この三幅対は『東都寸松庵主所蔵品』に所載されることから、寸松

庵すなわち高橋箒庵（義雄／一八六一—一九三七）が所蔵した。箒庵は明治三十五年頃に溝口家との直接取引により六十点余りの道具を購入していた。筆者は『人文（十三号）』で、箒庵が入手した作品を売立目録から明らかにしたが、この三幅対も直接取引により箒庵が入手した作品であると考えられる⁽²³⁾。

以上のことから観阿の取次ぎにより「十六夜の文」や趙昌筆釈迦如来像、狩野探幽筆江月宗玩像、同筆佐久間将監像の三幅も翠濤が入手し、同家のコレクション形成に観阿が関与していたことがわかる。

三 弘化三年八月の茶会

先述の『幽清館雜記』によれば弘化三年八月十六日に開催された翠濤の茶会について次のような記述がある。

一十六日は急に思付吟賞亭にて茶事

催し初座には十六夜の文長嘯子筆

松永貞徳宛をかくる

一昨日ハちやあとつり

此短冊此者 以使者申入候處無其

返可給候かしく

即各候遊候短冊共もたせてまいら

せて候可有一覧候将亦我々先日十七日

まで彼山庄候ていさよいの月たたひ

より見申候つる物さひひとしほ必ずミ

わたり候つる月を待ちかねて靈山の

みねをこへやましなのうへまであかり

候へ八月いて申清光をおひて帰宅

しさるおりしも古今序に月を

おもふとしてしるへなきやミとれると

いへる事おもひいてられ候まま

まことにそ闇にたとれる出ぬまハ

月まつやまによちのほりつつ

さひしさハ山のかひあるすみかにて

心ひとつのしつかなる哉 人々

被帰候て一心無事仙郷

メ 勝遊老 郷候

一露瓢堂床十六日ハ玉舟一行双幅をか

くる（卷十二）

十六日、翠濤は急遽、幽清館内の九畳の広間で一間の床の間がある吟賞亭にて正午茶事を開催した。吟賞亭の床の間には長嘯子筆貞徳宛の「十六夜の文」を掛け、八畳の広間で一間床がある露瓢堂では玉舟宗瑠（大徳寺一八五世／一六〇〇—一六六八）の一行双幅を掛けた。

『幽清館雜記』に書かれる長嘯子の消息の内容から、個人蔵本と判断される。この茶会は八月十六日が十六夜である事に因んだため急遽、開催された。初座で「十六夜の文」が掛けられた点から濃茶席が吟賞亭であり、茶会で使用される道具中、中心となる作品として本幅が使用されたことがわかる。

露瓢堂でも掛物が掛けられたが、ここは掛物のみを展観する場所、もしくは薄茶席が披の間として使用されたと考えられる。

この茶会について『幽清館雜記』をみると次のような記述がある。

(弘化三年)

同年同月十六日正午時の御茶会あり御客

ハ竹腰正富君小堀宗中子道樹宗休なり

床の御掛物は木下長嘯子十六夜の歌入

文をかけさせらる宛名は松永貞徳也

まことにぞ聞にたとれる出ぬま八月まつやまに

よちのほりつつ

さひしさハ山のかひあるすみかにて心ひとつの

しつかなる哉

今日の御掛物時に当りて殊更めつらしき

御真筆御うたからも面白侍ると宗中

子の御賞詞ありき(巻五)

この茶会に参会した客は竹腰正富(蓬月／一八一八―一八八四)、小堀正優(宗中／一七八六―一八六七。以下では宗中と統一する)、鳥羽屋道樹、鈴木宗休である。正富は尾張藩附家老で茶の湯を宗中に学んだ。宗中とは『原色茶道大辞典』によれば「天明六年―慶応三年(一七八六―一八六七)幕臣、遠州茶道宗家八世。六世政寿の男。大膳を称し、宗中・和翁と号した。分家小堀政純らの嘆願が容れられて文政十一年(一八二八)召出され、切米三百俵を給わり、本家小堀氏の名跡を復興した。その長子の宗本(正和)、次子政安(後の権十郎)を薫陶し、茶家小堀家を中興した業績が大きい」⁽²⁴⁾人物である。道樹は江戸十人衆の一人である。姓は三村氏で、不昧に茶の湯を学んだとされる。⁽²⁵⁾宗休は柳営数寄屋頭格である。

茶会に招かれた宗中は、「十六夜の文」に書かれる十六日と同じ日にこの掛物を用いた点や筆跡と歌も出来が良いことから、本幅を激賞していたことがわかる。

十六日の茶会は急遽開催されたが、十四夜である二日前には茶会、十五夜である前日には月見の宴が開催されていた。

先ず十四日の茶会について『幽清館雜記』には次のような記述がある。

同年八月十四日茶の会あり醒雲亭に

て御初座床御掛物深草元政上人の御歌也

磨礪一鏡浮萬影更絶妙智亡妙境魔界佛

界同一如白雲深処明月静

一むらの雲さへ秋のひかりにてくまなきそらに

すめる月影

夫より開の御間吟賞亭ハ床の御かけもの

絹地豎物月の絵探幽筆なり同所つ

き春夢亭にて床御掛物山崎宗鑑書

双幅を掛けさせらる

三五夜中新月色二千里外故人心

御客ハ小堀宗本子谷村可順山勢検校

御話ハ河上宗寿なり(巻五)

十四日の茶会では醒雲亭が初座とあり、本席であったことがわかる。掛物は日政(元政上人／一六二三―一六六八)による歌で「一むらの雲さへ秋のひかりにてくまなきそらにすめる月影」とある。この歌は寛文十二年(一六七二)発刊の『草山和歌集』にも所収されている。その前

文には

無有魔事雖有魔及魔民皆護佛法

(魔有ること無し。有りと雖も魔及魔民皆佛法を護る。⁽²⁶⁾)

とあり、「一むらの雲さへあきの光にて隈なき空にすめるつき影」の記載がある。前文の漢詩は異なっているが、歌が同一であり著名であったため、本席の掛物として用いられたと考えられる。

当日は披の間として吟賞亭が使用され、狩野探幽(一六〇二―一六七四)の絹本による月の絵が掛けられた。

春夢亭では連歌師の山崎宗鑑(一四六五―一五五三)による双幅「三五夜中新月色」と「二千里外故人心」が掛けられた。この漢詩は中唐の詩人白居易(七七二―八四六)による「八月十五日夜禁中獨直對月憶元九」(八月十五日之夜、禁中に独り直し、月に対して元九を憶う)の一節である。

詩の全文を掲げると次のようになる。

銀臺金闕夕沈沈
獨宿相思在翰林
三五夜中新月色
二千里外故人心
渚宮東面煙波冷
浴殿西頭鍾漏深
猶恐清光不同見
江陵卑濕足秋陰

(銀臺、金闕、夕べに沈沈たり、独り宿して相い思いて翰林に在り、三五夜中、新月の色、二千里外、故人の心、渚宮の東面、煙波冷ややかに、浴殿の西頭、鍾漏深し、猶だ恐る、清光の同に見ざるを、江陵は卑濕にして秋陰足らん)⁽²⁷⁾

この詩は中国の元和五年(八一〇)の作である。宮中に宿直した白居易が、親友で、当時左遷されて湖北の江陵にあった元九(元稹/七七九―八三一)を想い詠んだ詩である。⁽²⁸⁾十五夜に因み掛けられたと考えられる。

客は小堀宗本、谷村可順、山勢検校、詰(末客)が川上宗寿であった。宗本(正政/一八一三―一八六四)とは宗中の長男でこの当時、三十四歳であった。⁽²⁹⁾ほかの客は御数寄屋頭格である可順、越後出身の箏曲家である山勢検校、不白流宗匠宗寿であった。

次に十五日に開催された月見の宴で使用された掛物について『幽清館雜記』により各居室に用いられた掛物がわかる。

醒雲亭	南囲	深草元政上人	詩歌自筆	横物一幅
吟賞亭(開之写)	春夢亭(同所六畳)	絹豎物一幅	月の絵	探幽画
客坐敷清韻堂	東囲静雲亭	山崎宗鑑書	豎物	二幅一対
表居間格斎	佐川田喜六	自詠短冊	月見	
休息寢所露瓢堂	(左) 中院通躬、	(右) 久世通夏	懷紙二幅	
	八月十五日夜月			
	豎物月画賛一幅			

狩野晴川院筆 月に霞の図

大綱宗彦賛

西書斎 烏丸光廣 自詠和歌懷紙 江月（卷十二）

また同書には

右のうち茶客の人見る所ハ南囲と開との二ヶ所也（卷十二）

とある。

前日の十四日の茶会で、本席となる醒雲亭（南囲）には日政による歌、吟賞亭（披の間）には探幽の月、春夢亭には山崎宗鑑による双幅が掛けられていた。このことから茶客とは十四日の茶会の客として招かれた宗本、可順、山勢、宗寿のことを指しており、他の居室の掛物は拝見していなかったことがわかる。

同書ではさらに次のような記述がある。

圓齋床かけ替ニして桜井基佐殿句入文をかくる（卷十二）

十五日には居室の一つである圓齋で、別の掛物が掛けられていたようであるが、茶会か宴の後、室町時代後期の連歌師、桜井基佐の句入消息に掛け替えられた。

ところで現在、個人が所蔵する宗中筆三幅対「溝口翠濤追憶和歌三首雪月花」がある。表具は一文字が丸龍紋金襴⁽³⁰⁾、中廻が雲緞子（唐物緞子か）、上下が北絹である。

三幅対を収納する箱には蔵印や墨書による書付等はみられない。筆跡

に注目すると、中幅の文字は宗中が極状などに書く場合にみられる謹直な筆跡であるのに対して、左右はやや穏やかな印象を受ける。行頭の書き出しをみてみると花、月、雪の順に行頭が下がり再び上がっていることから、このような順序で書かれたと想像される。なお、この三幅対は溝口家の掛物蔵帳である『御掛物帳』に

一 三幅^(マ)對雪月花之哥 宗中筆

として所載されおり、溝口家の旧蔵品である⁽³¹⁾。また三幅対が直溥に贈られたのは文久二年（一八六二）以降であることがわかる。他の二幅も同様の書式で書かれていることから、翠濤が安政五年（一八五八）行年六十歳で没したのち、宗中が次代の当主である十一代藩主直溥（一八一九—一八七四）に贈った和歌三首であることが推察される。

筆者はこれまで「花」幅⁽³²⁾および「雪」幅⁽³³⁾を紹介した。そこで「月」幅（図9）に注目すると次のように書かれている。

秋の日月の御会とてめされしに

御床のうちハさらなり萬のうつは

ものはし／＼のもろ／＼にいたるまで

一に月にあらさるハなかれしに

心なき身にも秋をしるに明也

けれハ

宗中

おふかたに月もなかくて過ぬへし

かゝるめくみの事なかれせは

秋の日、月の御会が溝口家で催され、宗中も召された。床の間の掛物はいうに及ばず、多数の道具が使用されたことと記される。一番の主題が月でなかったとしても、俗世間を捨てきった自身も秋を感じずにはいられないという。そして一首「おふかたに月もなかくて過ぬへしかとるめくみの事なかれせは」を詠じた。歌意は月を眺めてもただ気持ちが悪くばかりだが、翠濤との出会いがなければ、そのような自分であつたであろうと解することができる。

宗中は十四日の茶会に参会せず、息子の宗本が参会していた。ここで述べられる月の御会とは文中、「秋の日月の御会とてめされしに」とあることから、弘化三年八月十六日に急遽開催された茶会に招かれたことが判断される。⁽³⁴⁾このとき宗中は六十一歳である。

「月」幅が書かれたのは文久二年以降すなわち宗中七十七歳以降で、十六年以上も前の茶会であるにも関わらず、「十六夜の文」を激賞したこともあつて記憶に残る思い出深い茶会であつたことがわかる。

四 むすび

長嘯子による「十六夜の文」は、これまで吉田によって紹介されるも、観阿による箱墨書や溝口家の蔵印については明らかにされていなかった。

「十六夜の文」は長嘯子が十六夜の夜、月を求めて山科に赴き、その姿を古今和歌集仮名序にある「やみにたどれる心」に重ねた内容を述べたものである。また消息中、月に因んで二首を詠じた。本消息は長嘯子と貞徳の交流を伝える資料に留まらず、長嘯子の伸びやかな筆跡から「華やかな生涯の明るさは感じられても、苦悩に沈む暗さが全く感じられない」とする作例としても重要である。⁽³⁵⁾

「十六夜の文」の箱墨書と巻止は観阿による。箱墨書の署名は謹直に書かれ、巻止の花押から五十代後半から六十代後半までのものと判断した。また箱には新発田藩主溝口家の旧蔵品を示す「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印が貼られており、同家の掛物の蔵帳である『御掛物帳』にも所載されていた。観阿は溝口家に入りし道具を翠濤に取次いでいた。本稿では「十六夜の文」、趙昌筆釈迦如来像、狩野探幽筆江月宗玩像、同筆佐久間将監像の三幅対も観阿によって取次がれた作品であることを明らかにした。観阿による道具の取次ぎは、翠濤の優れたコレクション形成に貢献した。

「十六夜の文」を入手した翠濤は、弘化三年八月十六日の茶会で使用していた。十四日は十四夜を趣向とする茶会を催し、十五日には十五夜を趣向とする宴を開催していた。翌日の十六日は急遽、十六夜を趣向とする茶会が開催されていた。翠濤は茶会当日、「十六夜の文」を本席初座の掛物という茶会の主眼となる道具として用い、重宝としていたことがわかった。この茶会には宗中も招かれていた。

翠濤没後、宗中は在りし日の交流を踏まえ雪月花に因んだ三首を詠じ、三幅対にして息子の直薄に献上した。これまでの筆者の研究では三幅対のうち「花」幅、「雪」幅について関係する作品を明らかにした。「十六夜の文」の周縁を明らかにしたことで、「月」幅で述べられる「月の御会」とは弘化三年八月十六日に急遽開催された茶会である。筆跡と内容の良さから宗中の記憶に残る作品であつたことがわかった。

謝 辞

本稿執筆にあたり調査にご協力いただきました東大寺、上野道善師、東京大学史料編纂所、新発田市立歴史図書館、日経B P未来研究所仲森

智博氏、国立能楽堂高尾曜氏、個人のご所蔵家の皆様、東京文化財研究所、同志社大学ラーネット記念図書館に深謝申し上げます。

付記

本稿は以下の発表を一部改訂したものである。

宮武慶之「溝口家と小堀家―遠州所持の道具五種を起点として―」、公益財団法人小堀遠州顕彰会、第十一回秋季講演会、平成二十八年十月

十一日、於江戸東京博物館。

宮武慶之「白醉庵・吉村観阿の生涯―苦楽と夢楽―」、茶の湯文化学会近畿例会、平成二十八年十一月十二日、於同志社大学今出川校舍良心館。

売立目録の調査は平成二十五年度・出光文化福祉財団調査・研究助成、宮武慶之、財津永次「売立目録所載の墨蹟画像データベース構築による筆跡の検討」による。

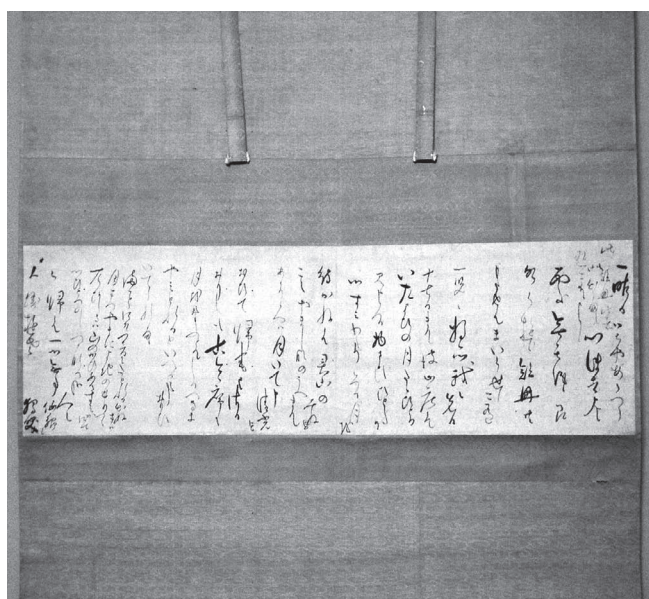


図1 木下長嘯子筆松永貞徳宛消息「十六夜の文」(個人蔵)

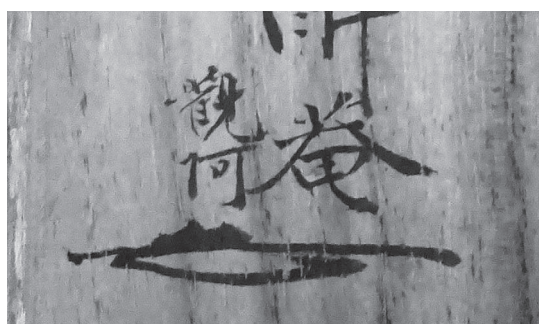


図3 「十六夜の文」を収納する箱墨書にある観阿花押



図2 「十六夜の文」を収納する箱甲の墨書(部分)

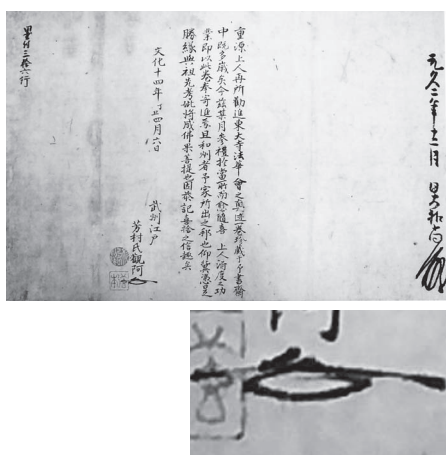


図4 俊乗房重源筆「法華勸進状」の奥書と花押の拡大部分(東大寺蔵。画像提供は所蔵元)

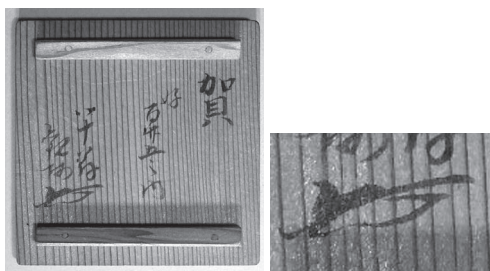


図6 「一閑桃之絵細秦」を収納する箱蓋裏の墨書と拡大部分（個人蔵）

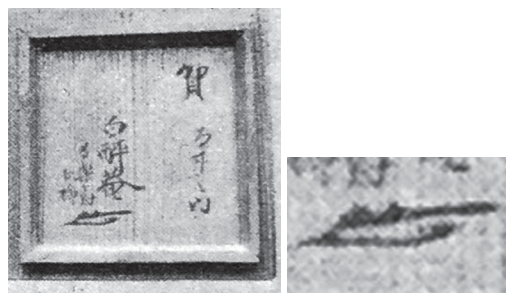


図5 「瓢茶器」を収納する箱蓋裏の墨書と花押の拡大部分（『知音』より転載）



図8 中) 趙昌筆釈迦如来像、右) 狩野探幽筆江月宗玩像、
左) 狩野探幽筆佐久間将監像（『東都寸松庵主所蔵品』より転載）



図7 「十六夜の文」を収納する箱側面に貼られている
「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印

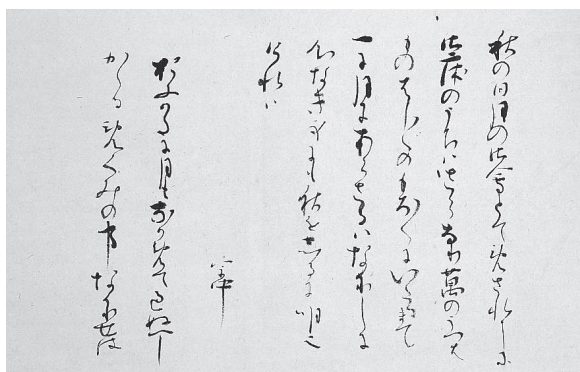


図9 小堀宗中筆溝口翠濤追憶和歌三首「雪月花」のうち「月」（個人蔵）

註

- (1) 高橋義雄『大正名器鑑』第二編、宝雲舎、一九三七年、九八一―一〇二頁。
- (2) 高橋義雄『大正名器鑑』第一編、宝雲舎、一九三七年、一九八一―二〇〇頁。
- (3) 吉田幸一「長嘯子と貞徳の新出書簡をめぐって」『文学論藻』通号四十八号、一九七三年、六四―七四頁。
- (4) 吉田幸一編『長嘯子全集』第五卷、古典文庫、一九七五年、二三八―二四〇頁。
- (5) 前掲註(3)。吉田幸一「長嘯子と貞徳の新出書簡をめぐって」。
吉田の論考発表当時の所有者は島本松雄であった。
- (6) 宮武慶之「白醉庵吉村観阿について」『日本研究』第五十四集、国際日本文化研究センター、二〇一六年、三九―七七頁。
- (7) 前掲註(3)。吉田幸一「長嘯子と貞徳の新出書簡をめぐって」。六七―七〇頁。
- (8) 『長嘯家集』龍谷大学図書館蔵。請求記号 021-545-4。
- (9) 片桐洋一『古今和歌集全評釈』上巻、講談社、一九九八年、一七二頁。
紀貫之の仮名序には次のような記述がある。
いにしへの世々のみかど、春の花のあした、秋の月の夜ごとに、さぶらふ人々をめして、ことにつけつつ、うたをたてまつらしめたまふ。
あるは、花をそふとて、たよりなき所にまどひ、あるは、月をおもふとて、しるべなきやみにたどれる心々を見給て、さかし、をろかなりとしろしめしけむ。
- (10) 前掲註(9)。片桐洋一『古今和歌集全評釈』。
長嘯子が述べた仮名序の当該部分について片桐は次のような通釈を行っている。

古代の代々の天皇は、たとえば春の花咲く朝とか、秋の月のすばらしい夜とか、そんなたびごとに、侍臣たちを召し集めて、その折々の事に託して和歌を詠ませて奏上させなされる。そこで、ある人は花を恋慕っておぼつかない所で迷い、またある人は月を思う我が心を表そうとしてどちらへ行つてよいかわからぬ闇路をたどつて行ったりしているというようにそれぞれが苦心している心をご覧になって、すぐれた男だとか駄目な男だとか御判断なさったようである。

(11) なお『萃白集』には所収されない。

(12) 前掲註(3)。吉田幸一「長嘯子と貞徳の新出書簡をめぐって」。
吉田によればこの号による書状は極めて珍しいとの事である。

(13) 前掲註(6)。宮武慶之「白醉庵吉村観阿について」。

(14) 宮栄二「溝口翠濤と観阿のことなど」『知音』第五十号、一九五四年、八一―一頁。箱墨書をみると「賀 百二十之内 白醉庵 苦楽翁 古稀(花押)」とある。同書における宮の解説によると、この茶器の箱蓋裏には「員外五ノ内 観阿」という墨書があると報告している。すなわち百二十個の茶器に五個を加えた総数百二十五個が作成され、知友に配布されていた。

(15) 前掲註(6)。宮武慶之「白醉庵吉村観阿について」。

(16) 宮武慶之「溝口家旧蔵の茶道具拾遺(二)」『文化情報学』第十一卷第二号、同志社大学文化情報学会、二〇一六年、一三五―一四四頁。同家の蔵印は三種あり、比較検討を行なった。

(17) 宮武慶之「御掛物帳」にみる溝口家旧蔵の書画」『新潟県文人研究』第十六号、越佐文人研究会、二〇一三年、一五七―一九一頁。

(18) 『幽清館雜記』東京大学史料編纂所蔵。請求記号溝口家史料-169。

(19) 宮武慶之「新発田藩溝口家旧蔵の大燈国師墨蹟について―物我両忘と日山賦を中心に―」『文化情報学』第九卷第一号、同志社大学文化情報学会、

二〇一三年、九九—一二二頁。

(20) 前掲註(6)。宮武慶之「白醉庵吉村観阿について」。

(21) 門脇むつみ『寛永文化の肖像画』勉誠出版、二〇〇三年、五一—五二頁および二二三—二四頁。

(22) 各目録で作品の表記をみると次のようになる

『東都寸松庵主所蔵品』

趙昌釈迦 左探幽江月和尚像 右同佐久間將監像 三幅対

江月自作彫字箱 外箱白醉庵 江月外題 寸松庵伝来品

『堺市宅醸春軒所蔵品入札(第二回)』

趙昌釈迦 左右探幽江月和尚佐久間將監像 江月賛 江月外題

三幅対 江月自刻箱書付 白醉庵外箱 寸松庵伝来

竪二尺三寸二分 巾一尺一分

(23) 宮武慶之「明治期における溝口家の道具移動史」『人文』十三号、学習院大学人文科学研究所、二〇一五年、二三—二五二頁。

(24) 井口海仙監修『原色茶道大辞典』、淡交社、一九七五年、三七四頁

(25) 所持した道具では中興名物茶入「藻塩」(野村美術館蔵)がある。

(26) 小林好日校註『近古諸家集全』、国民図書株式會社、一九二六年、九七五—九七六頁。

(27) 川合康三訳注『白楽天詩選』上巻、岩波書店、二〇一一年、二三八—二四一頁。

(28) 前掲註(27)。川合康三訳注『白楽天詩選』。

(29) 小堀宗慶『遠州流茶道宝典』、東京堂出版、一九八三年、八八—九一頁。

宗中、宗本と弟、政安は溝口家に伺候したとされる。十四日の茶会記から、宗本は正客として、溝口家では丁重に扱われていたことがわかる。

(30) 一文字の丸龍紋金欄については、三幅対が翠濤追憶を意図しており、翠濤

の院号が見龍院殿に因んだものと解せられる。

(31) 箱には溝口家の旧蔵品を示す「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印はない。

(32) 宮武慶之「新発田御道具帳にみる溝口家旧蔵の茶道具」『文化情報学』第九巻第二号、同志社大学文化情報学会、五九—一二二頁、二〇一五年。

「花」幅では文久二年三月五日の花を趣向にした茶会について述べられている。調査により文久二年の茶会で使用された茶碗が現在、個人が所蔵する黄伊羅保茶碗銘「团扇」であることを明らかにした。

(33) 宮武慶之「高麗堅手鉢子茶碗銘《白妙》について」『野村美術館研究紀要』第二十三号、野村文華財団、二〇一四年、一〇八—一二六頁。

現在、野村美術館が所蔵する高麗堅手鉢子茶碗銘「白妙」は溝口家旧蔵品であり、箱墨書の筆者は宗中であることを明らかにした。

(34) 十五日の月見の宴に宗中が参会した可能性も考えられるが、現時点では確認できない。

(35) 今井庄次編『書の日本史』第五巻、平凡社、一九七五年、二〇六—二〇七頁。長嘯子の項を担当した熊倉功夫は「夕立」とする和歌懐紙の解説で指摘している。